日本行動計量学会
計量学会報
第37号
1985年9月30日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

期待と戸惑い

岡太彬訓

最近のパーソナルコンピュータの普及には目覚しいものがある。一般新聞にも毎日のようにパーソナルコンピュータの広告が掲載され、その新聞に入っている折込み広告のビラにも近所の安売り電器店でのパーソナルコンピュータやワードプロセッサの2・5割引、3割引という色刷りの大きな文字が目に入る今日此頃である。また、ゲーム専用に近いとはいいながら小供用のパーソナルコンピュータの普及も目を見張るものがある。

行動計量学の様々の分野がその発展のかなりの程度をコンピュータの進歩と普及に負っていることは、論を待たない。筆者の学生時代といっても高々十五年から二十年位前のことになるが、主記憶が2キロワードから30キロワードのコンピュータを紙テープやパンチカードで使用したことを現在の状況と比較すると、その費用対効用比の違いは驚くばかりである。現在、例えば筆者の演習に参加している学生の大半はハンドヘルドコンピュータ以上のパーソナルコンピュータを所有し、リポート等を提出させると、ワードプロセッサで書いたものが幾つか混じるようになった。

コンピュータの発展、特にパーソナルコンピュータの普及は行動計量学の発展に色々な影響を与えてきたが、ここではポジティブな一つの面とネガティブな一つの面について焦点を合わせてみたい。

ポジティブな面ですぐに目に付くことは、統計的分析やデータ解析、特に多変量解析が容易にできるようになったことである。しかし、これはどちらかと言うと、一九六〇年代から現在にかけての面であろう。将来は、これらの様々な手法やモデルを、その意味や考え方あるいは思想を直観的視覚的そして体験的に容易に理解できるような面でパーソナルコンピュータを役立てることが重要である。従来のやり方である形式を重視し手続きを追って理解を進めるようなやり方も有効であることは当然であるが、より直観的あるいは全体的な理解の仕方も考えるべきであろう。そのためのソフトウェアの開発が望まれる。そして、そのような理解を通じて、本学会の目的である学際的研究の裾野を広げ、より体系的な学際的研究を刺激することができる。

ネガティブな面は、ソフトウェアの取扱いの問題である。パーソナルコンピュータのソフトウェアを購入して、こまごまと記されている契約書の使用条件の厳密さに驚く一方で、ソフトウェアをコピーするためのソフトウェアが堂々と宣伝されていることに矛盾を感じるのは筆者だけではあるまい。大半の人間がソフトウェアのコピーを作成し他人に与えたりそのようなコピーを他人から貰ったりすることに大した罪悪感を持たないということは日常生活の感覚としては理解できるとしても、ソフトウェアの使用契約書と照らし合わせると異常なことである。研究や教育が進められる日常生活の感覚と、契約書で規定される権利関係とが大きく乖離していることが問題である。ソフトウェアの作成者の権利は十分に保護されるべきではあるが、そのソフトウェアの使用が著しく不便になったり、使用する際に履行不可能な義務が伴うことは、角を矯めて牛を殺すことになりかねない。書籍や音楽、レコード等でも同じことであろうが安心してソフトウェアを開発し、効果的に使用できる上手な解決法が望まれる。このことが行動計量学の発展を側面から支えると思われるからである。

（おかだ・あきのり　日本行動計量学会理事　立教大学教授）

第十三回大会報告

実行委員長　河口至商

第十三回日本行動計量学会大会は九月二、三、四日の三日間にわたり、今までの大会とは趣きをかえて、中央部から遠く離れた札幌（北海道大学工学部）で開催されました。

この話があった当初には、学際的な本学会の大会を果たして北海道において開くことができるものかと心配したのですが、一般講演も十分集まり、パネル形式のシンポジウムは戸田先生により「人間行動のモデルと人工知能」と題して企画され、全国から五人の著名な方をお招きすることになりました。また特別講演は北大の五十嵐日出夫、吉本千禎両先生にお願いし、「二十一世紀における北海道の総合交通体系」と「盲人と聾者の行動と代行感覚」に決まりました。プログラムを発送し、講演抄録集の原稿を印刷所にまわして、ほっとした時に突然日航ジャンボ機の事故が起こり、驚天動地とでも申しましょうか、テレビや新聞で大騒ぎになりました。これによる本大会への影響を考えますと、参加者の減少することが想定され、予算を変更しなければならず、広告、寄付等の御援助を仰ぐ必要性がより増大しました。

二百十日の防災の日、九月一日に、第十三回大会と符合したように、招かざる客、十三号台風が北海道を襲い、空の便や青函連絡船の欠航が相次ぎ、鉄道のダイヤも大幅に乱れてしまったのです。九月二日の大会初日の朝、会の成立さえ危ぶまれたのですが、講演者や座長の方々をはじめ皆様種々の困難を克服し、次々と北大工学部の玄関に到着されました。開会の時刻は各セッションの座長の方におまかせし、十分から三十分位の遅れで始めることができました。実行委員長としてこれほど嬉しいことはありませんでした。後に皆様の御苦難の話を伺い、ただ頭の下がる思いです。

札幌ビール園での懇親会も予定通りにはこび、お世話の甲斐があり、林理事長から、『これまでの大会の懇親会で一番盛り上りがあった』とのおほめの言葉を頂きました。またこのように大会が無事終了することができましたのは会場関係者各位、アルバイトでお手伝い頂いた方々の御協力の賜物と深く感謝いたします。

大会事務局報告

一、実行委員会の構成

河口至商（北大工）を実行委員長として、戸田正直（北大文）、山元周行（北大理）、三宅浩次（札医大）、竹川忠男（札医大）、蓮池　穣（北星女子短大）、斎藤堯幸（北大文）、松村良之（北大法）、佐藤義治（北大工）の九名で実行委員会を構成し、実行委員の補助として、北大情報数理工学教室のメンバーが中心となり事務処理を担当しました。

二、大会参加者数

正会員一〇三名、準会員六名、非会員（招待者を含む）十一名、以上一二〇名に実行委員等十九名を加えて合計一三九名でした。

三、個人発表件数

個人発表の総数は五一件で、九つのセッションに分かれて行なわれました。各セッションと発表件数は次のとおりです。

	セッション名	発表件数
第一日	A医学・心理 B情報処理・計算機利用 C多変量解析	五 六 六
第二日	D環境・行動モデル E教量化・質的データ解析 F教育・行動	四 六 四
第三日	G調査 H尺度構成（Ⅰ） I社会 J尺度構成（Ⅱ）	五 六 五 五

四、懇親会

サッポロビールやジンギスカンを堪能して頂こうという主旨で、サッポロビール園にて懇親会を開きました。参加者は五四名でした。

五、広告・寄付

シンポジウムの講演や特別講演に招待するための費用等につきましてはいくつかの団体からの広告および寄付による賛助後援をいただきましたことをご報告し、合せてこの紙面を拝借して各団体の皆様に厚くお礼申し上げます。

最後に本大会がますます盛況となりますように心から祈り報告を終えます。

第七期理事会の会務分担決まる

五月七日開催の理事会で決定した理事の役割分担は次の通りです。任期は昭和六十三年三月末日まで。

〔編集委員長〕野元菊雄（国語研）
〔和文誌編集幹事長〕柳井晴夫（千葉大・文）〔欧文誌編集幹事長〕上笹恒（筑波大・哲思）、〔運営委員長〕駒澤勉（統数研）〔刊行物委員長〕肥田野直（大学入試センター）、〔対外担当〕古川俊之（東大・医）、〔関西担当〕井上通敏（阪大・医）、木下冨雄（京大・教養）、〔大会担当〕鈴木達三、〔学術会議担当〕池田央（立大・社会）、水野欽司（統数研）〔庶務担当〕岡太彬訓（立大・社会）、岩坪秀一（大学入試センター）、水野欽司（統数研）

第七期各種委員決まる

七月十九日開催の理事会で承認された各種委員の氏名は次の通りです。将来、それぞれ若干名の委員の増員もあり得ます。任期は昭和六十三年三月末日まで。

○編集委員会

〔編集委員長〕野元菊雄（国語研）
〔委員〕（和文誌・欧文誌共通）
河口至商、戸田正直（北大）、西田春彦（東北大）、京極純一（千葉大）、林知己夫（統数研）竹内啓、芝祐順、古川俊之（東大）、奥野忠一（東理大）、肥田野直（大学入試センター）、木下冨雄（京大）、丘本正（阪大）、生澤雅夫（阪市大）、脇本和昌（岡山大）、浅野長一郎、工藤昭夫（九大）　以上十七名
〔和文誌編集幹事〕○柳井晴夫（千葉大）、斎藤堯幸（北大）、海野道郎（東北大）、久保武士（筑波大）、田栗正章、星守（千葉大）、前田俊郎（専修大）、豊川裕之、大橋靖雄（東大）、高木広文（聖路加看護大）、水野欽司、駒澤勉（統数研）、池田央（立大）、石塚智一（大学入試センター）、後藤昌司（塩野義解析センター）、永岡慶三（神戸大）、田中豊（岡山大）　以上十七名
〔欧文誌編集幹事〕○上笹恒（筑波大）、丸山久美子（盛岡大）、松原望、竹村研一（筑波大）、野崎昭弘（ＩＣＵ）、薬師寺泰蔵（埼玉大）、佐伯胖（東大）、宮原英夫（北里大）、村上征勝（統数研）　以上　九名
右○印は、各編集幹事長。

○運営委員会

〔運営委員長〕駒澤勉（統数研）
〔委員〕佐藤義治（北大）、関田康慶、海野道郎（東北大）、江川清、杉戸清樹（国語研）、高木広文（聖路加看護大）、柳原良造（マーケティングサービス）中村隆（統数研）、田栗正章（千葉大）、辻本英夫（阪市大）、村上隆（名大）、垂水共之（岡山大）、楠岡英雄（阪大）、辻岡克彦（川崎医大）、山田文康（大学入試センター）、市川雅教（放送研）　以上十七名

○刊行物委員会

〔刊行物委員長〕肥田野直（大学入試センター）
〔委員〕古川俊之（東大）、松原望（筑波大）、安本美典（産業能率大）、柳井晴夫（千葉大）　以上　五名

会議記録

○理事会

時・昭和六十年五月七日
所・統計数理研究所
出席者・理事十三名

1. 理事の会務分担が決まった（上欄参照）。次回の理事会までに各種委員の候補者を立てて承認を求めることとした。なお庶務担当理事については、三年交代を原則とすることを承認した。
2. 学会賞委員会を設立し、京極純一（委員長）、水野欽司、井上通敏、岩坪秀一各理事、杉山明子、丸山久美子両氏の六名の委員が任命された。委員会は、学会賞の種類、内容、選考の仕組み等について協議し、その結果を次回の理事会で報告することになった。
3. 河口理事から十三回大会の準備は順調である旨報告があった。
4. きたる五月九日、日本学術会議行動科学研連の会員を決める推薦会が行われる旨、池田、水野両理事（推薦人）から報告があり、本学会の活動目的に沿った人物を投票することで一致した。
5. 日本健康科学会（大島正光会長）に協賛した旨の報告があった。
6. 各種委員会の報告があった。

○和文誌12巻2号は、七月完成見込み、13巻からは柳井新幹事長が編集を引継ぐ（池田幹事長報告）。

○欧文誌にも展望・特集をのせる案がある旨の説明があり、ま

た招待論文収集の協力要請があった（松原幹事報告）。

○講習会、月例シンポジウムの計画の説明があった（駒澤運営委員長報告）。

○刊行物の執筆状況について報告があった（肥田野刊行物委員長報告）。

○理事会

時・昭和六十年七月十九日
所・統計数理研究所
出席者・理事十二名・監事一名

1. 編集委員四十三名、運営委員十七名、刊行物委員五名を承認した（人数には各委員長も含む）。三頁参照。
2. 水野理事より学会賞委員会の審議経過報告がなされ、昭和六十一年度に第一回授賞者を出すべくさらに詳細な検討を行うこと、学会賞基金は特別会計にすること、要点をきたる十三回総会で報告すること等の説明があった。本委員会は、選考準備が整った時点で解散し、改めて選考委員会を設立することとした。
3. 水野理事より、行動科学研連の会員に内山喜久雄氏（新潟大・教育）が選ばれた旨の報告があった。新行動科学研連から、本学会より委員一名の推薦依頼があり、学術会議担当の水野理事に委員を委嘱することに決定した。水野理事から、行動科学研連主催で行動科学シンポジウムを開く計画がある旨の報告があった。
4. 山本俊一氏（都老人総研）の本学会設立以来の貢献を讃え、名誉会員として推挙するための必要手続きをとることとなった。
5. 第十三回大会総会次第の大綱を検討した。
6. 事務局より、昭和六十年三月三十一日現在の予算状況確定分にのっとった最終決算報告と予算案が提出され、承認された。
7. 各種委員会の報告があった。月例シンポジウムの具体的計画について報告があった（運営委員会記録を参照のこと）。

○理事会

時・昭和六十年九月三日
所・北海道大学工学部
出席者・理事十一名

1. 学会賞について水野理事（京極学会賞委員会委員長の代理）よりの報告をもとに意見を交換した。第十四回総会時に第一回授賞者を出す方向で努力することとなった。
2. 名誉会員として山本俊一氏を推挙し、総会に提案し承認を求めることを決定した。

○運営委員会

時・昭和六十年四月十八日
所・統計数理研究所
出席者・運営委員　四名
　　庶務担当理事　二名

1. 講習会について
「探索的データ解析」をテーマに、十月下旬、南青山会館において渡部氏（東大）を中心に実施することに決定した。
2. 月例シンポジウムについて
六十年度に四回程度の実施を目指し、以下のテーマについてオーガナイザー等を検討した。①社会調査関係、②情報公開とプライバシー、③選挙、④認知科学の周辺、⑤医学における因果モデル、⑥データベースとデータ検索、⑦行動計量学の開拓すべき分野、⑧日本人研究または日本学。
3. その他
新しい運営委員の人選を検討すること、学会として科研費を獲得する方策などについて話合った。

○運営委員会

時・昭和六十年六月二十日
所・統計数理研究所
出席者・運営委員　六名
　　庶務担当理事　二名

1. 新運営委員について
運営委員長：駒澤　勉（再任）
運営委員：これまでの委員の構成を大きく入れ替えない。新たに、山田文康氏（大学入試センター）、市川雅教氏（放射線医学総合研）に加わってもらう。任期：六十年四月～六十三年三月（三年間）
2. 講習会について
テーマ：探索的データ解析
日　時：十月二十一、二十二日
会　場：南青山会館
講師陣：渡部氏（東大）他。
以上の計画を進める。
3. 月例シンポジウムについて
前回検討したいくつかのテーマについて実施を検討した。①情報公開とプライバシー、②医学における因果モデル、③行動計量学の回顧と展望、④日本人研究のあり方について
4. その他
若い会員の処遇について理事会に検討をお願いすることとした。

○運営委員会

時・昭和六十年九月四日
所・北海道大学工学部
出席者・運営委員　十一名
　　庶務担当理事　二名

1. 新運営委員選出経過報告及び紹介を行なった。駒澤運営委員長を含め十七名の委員により、六十三年三月までの任期を務めることを確認した。また、庶務担当理事が岩坪氏から岡太氏へ交代し、その紹介があった。
2. 講習会について
十月二十一、二日、「探索的データ解析入門」の講習会を行なうことを決定し、会員に配布するお知らせ、当日の準備等について検討した。
3. 月例シンポジウムについて
以下のテーマについて検討した。①情報公開とプライバシー（十一月下旬頃）、②医学における因果モデル（来春）、③行動計量学の回顧と展望（次回大会のシンポジウムとして）、④日本人研究のあり方（十月中旬頃）、⑤三相モデル（二月頃）、⑥地理学関係（関西懇話会）

○第十三回大会総会

時・昭和六十年九月三日
所・北海道大学工学部
〔開会の辞〕学会事務局（岩坪理事）
〔挨拶〕開催校（木下工学部長代理村田和美工学部教授）
〔挨拶〕学会（林知己夫理事長）
議長に戸田正直北海道大学文学部教授を選出した。
〔報告および議事〕
1、昭和五十九年度事業報告、同決算報告（林理事長ほか各担当理事より行われ原案通り承認された。）
2、会計監査報告（開原、宮原両監事代理の佐藤義治氏より行われ原案通り承認された。）
3、昭和六十年度事業計画・同予算案（林理事長および担当理事より行われ原案通り承認された）
4、名誉会員の推挙（林理事長より山本俊一氏が名誉会員として推挙され承認された。下欄参照。）
〔実行委員会挨拶〕（河口至商委員長）
〔閉会の辞〕学会事務局（岩坪理事）

☆昭和五十九年度会計決算と昭和六十年度予算は六～七頁に掲載。

名誉会員に山本俊一氏

このたび、山本俊一東京大学名誉教授・東京都老人総合研究所副所長が名誉会員になられました。山本氏は東京大学医学部を卒業後東京大学医学部教授となられ昭和五十八年より現職にお就きです。

氏は当学会の前身である行動計量学シンポジウム時代から事務局を東大医学部保健学科疫学教室に設置され、学会発足後は理事として学会活動が軌道に乗る上で尽力されました。この間、月例シンポジウム担当理事、学会総会担当理事、学会誌編集委員長、刊行物委員長として、学会の発展、若い学会員への指導に力を注がれました。

事務局変更のお知らせ

このたび、岩坪庶務担当理事が在外研究員として海外出張されることに伴い、学会事務局をきたる十月一日より左記に移転します。

〒171 東京都豊島区西池袋3丁目
立教大学社会学部　岡太研究室内
日本行動計量学会事務局

☆なお事務局への連絡は原則として**郵便で**お願いします。

★講習会が開かれます

学会主催の第16回講習会が左記の通り開かれます。別紙のお知らせ・申込要領により、多数の申込と御参加をおまちします。

日・昭和六十年十月二十一日(月)～二十二日(火)
所・東京都港区南青山五－七－十　南青山会館会議室
テーマ『探索的データ解析入門』

詳しくは同封の『お知らせ』を。

★外国人研究者来日の情報

カナダのトロント大学の社会学教授であるCharles L. Jones氏が、同国のソシアル・サイエンス・アンド・ヒューマニティ・リサーチ・カウンシルと日本学術振興会の協同プログラムによる招聘研究者として、本年十二月一日より一か月間、立教大学社会学部岡太研究室に滞在する予定です。

詳細は〒171東京都豊島区西池袋3丁目、立教大学社会学部、岡太彬訓までお問合せ下さい。

会員数　(60・9・7現在)
正会員　一、〇一八名
準会員　一〇三名
賛助会員　三八社

昭和59年度　会　計　決　算

昭和59年4月1日～昭和60年3月31日

収　入	決　算	予　算	増　減
前年度繰越金	629,284円	629,284円	0円
59年度学会費	5,369,500	5,365,000	4,500
（正会員　811名）	（4,037,500）	（4,000,000）	（37,500）
（準会員　72名）	（252,000）	（315,000）	（△63,000）
（賛助会員　36口）	（1,080,000）	（1,050,000）	（30,000）
他年度学会費	561,000	650,000	△89,000
積立金（繰越）	1,200,000	1,200,000	0
学会誌売上金	286,840	600,000	△313,160
大会講習会決算残高	200,016		200,016
（サマーセミナー）	（30,610）		
（12回大会）	（169,406）		
抄録集等収入	39,900		39,900
預金利子	129,999	130,000	△1
計	8,416,539円	8,574,284円	△157,745円

支　出	決　算	予　算	増　減
学会誌製作費	2,924,300円	4,528,600円	△1,604,300円
（和文誌12巻1号）	（996,400）	（950,000）	（46,400）
（〃　12巻2号）	（0）	（950,000）	（△950,000）
（欧文誌 №16）	（851,000）	（1,314,300）	（△463,300）
（〃　№17）	（1,076,900）	（1,314,300）	（△237,400）
月例会費用	112,120	120,000	△7,880
各種委員会活動	159,600	320,000	△160,400
学会事務委託費	1,664,374	1,474,400	189,974
（管理費）	（120,000）	（120,000）	（0）
（発送手数料）	（1,245,074）	（1,008,400）	（236,674）
（漢字処理加算費用）	（112,290）	（100,000）	（12,290）
（新入会員・異動処理）	（134,410）	（206,000）	（△71,590）
（その他）	（52,600）	（40,000）	（12,600）
人件費	48,600	60,000	△11,400
印刷費	289,500	300,000	△10,500
通信費	1,205,530	900,000	305,530
消耗品費	3,330	10,000	△6,670
交通費	0	10,000	△10,000
会合費	80,300	150,000	△69,700
雑費	16,570	70,000	△53,430
選挙費用	81,300	0	81,300
予備費	0	631,284	△631,284
次年度繰越金	1,831,015	0	1,831,015
計	8,416,539円	8,574,284円	△157,745円

昭和60年度　予　算

収　入	60年度予算	59年度実績	備　考
前年度繰越金（注1）	1,831,015円	629,284円	（注1）積立金120万円含む
学術定期刊行物補助金(注2)	800,000		（注2）内定額
60年度学会費	5,495,000	5,369,500	
正会員 5,000円×820名	4,100,000	4,037,500	
準会員 3,500円× 90名	315,000	252,000	
賛助会員30,000円× 36口	1,080,000	1,080,000	
他年度学会費	650,000	561,000	
学会誌売上金	550,000	286,840	
預金利子	100,000	129,999	
計	9,426,015円		

支　出	60年度予算	59年度実績	備　考
学会誌刊行費	5,478,600円	2,924,300円	
和文誌12巻2号（注3）	950,000	和文誌12巻1号	（注3）59年度未発行分
〃 13巻1号	950,000	996,400	
〃 13巻2号	950,000	欧文誌№16 851,000	
欧文誌№18	1,314,300	欧文誌№17 1,076,900	
〃 №19	1,314,300		
月例会費用	120,000	112,120	
各種委員会活動（注4）	300,000	159,600	（注4）編集幹事会，刊行物委員会，社会調査技法研究会
学会事務委託費（注5）	1,666,000	1,664,374	（注5）(財)日本学会事務センターへの委託費
管理費	120,000	120,000	
発送手数料	1,200,000（注6）	1,245,074	（注6）1,200名，年8回発送，多点発送物手数料含む
漢字処理加算費用	100,000（注7）	112,290	（注7）1,200名，年8回発送
新入会員・異動処理	206,000（注8）	134,410	（注8）新入会員70名，異動250名
その他	40,000（注9）	52,600	（注9）事務連絡費，コピー代，リスト打出し料等
人件費	50,000	48,600	
印刷費	250,000	289,500	
通信費（注10）	1,000,000	1,205,530	（注10）学会事務センターにおける郵税を含む
消耗品費	10,000	3,330	
交通費	10,000	0	
会合費	100,000	80,300	
雑費	40,000	16,570	
予備費	401,415	0	
計	9,426,015円		

学術会議13期会員の選出と本学会における対応について

報告

水野欽司

日本学術会議が、この七月から新しい選出会員二一〇名による第13期の活動を開始したことは、すでに承知のことと思います。

ところで、今回の会員選出は、法改正によって、従来の有権者による公選制から学術研究団体を基盤とする推薦制に変りました。その骨子は各学会が会員候補者や推薦人を選定して、研究連絡委員会（研連）を単位とする推薦人のグループが会員を推薦するというものです。そのため、本学会もこの会員選出に関わることになり、理事会の責任で対応してまいりました。ここでは、その概略を報告したいと思います。

①関連研究連絡委員会　会員推薦に先立つ学会登録では、関連する研連として、新設の「行動科学」（1部、専門・心理学）を指定しました。学際的な本学会にとって十分ではなくても、相対的ベストの選択であると判断しました。なお、専門・心理学の下の行動科学という関係が逆順の印象を与えますが、新設研連ゆえの経緯でこの形になった、と聞いています。

②会員候補者と推薦人　理事会での数回にわたる検討の結果、今回は会員候補者の推挙を見送ることに決めました。この結論は少々心残りを与える内容でした。これも学際性と関連しますが、本学会の会員候補として好適な方々が、他学会から他の研連に推薦されるという状況があったこと、新設研連で見通し困難な中では、候補者に迷惑が及ぶ心配があること、などを慎重に配慮したためです。

関連研連の会員推薦人会議に出席する推薦人については、本学会に2名の割当がありました。推薦人は〝所属する学術研究団体の構成員であるという立場を超えて大局的見地に立ち、会員としてふさわしい者を決定・推薦する〟（会員推薦管理会）のが任務であり、池田・水野の両理事がこの大任を負うことになりました。

③推薦人会議　五月九日開催、結果として行動科学研連に割当てられた1名の会員に内山喜久雄氏（新潟大教授）が推薦されました。

以上が概略ですが、この間、すべての事項に理事会が責任をもって対処しました。他の学会では会員候補者や推薦人を学会員の選挙で決める例もありましたが、本学会はそうしませんでした。これは、今回の推薦制は学会の利益代表を送り込むものではなく、多数決原理に任せるよりは、理事会の責任で諸般の事情を配慮し、最善の対応を考えるのが妥当である、という考え方によったものです。

以下は私見ですが、この種の場合、とかく学会エゴや学会内エゴが生れやすいものですが、本学会の場合は、学術会議の〝個別分野を超えて科学全体の向上を図る〟という趣旨に沿った良識ある態度で終始した、と思っています。

関連の研連に会員候補こそ出しませんでしたが、学術会議全体でみると、本学会には他学会からの推薦で選出された会員が6名おられます。梅岡義貴（1部・心理学）、関寛治（2部・政治学）、竹内啓（3部・経済統計学）、林知己夫（4部・統計学）、小泉明（7部・衛生学）の諸氏です。括弧内は所属の部と関連研連名ですが、改めて本学会の学際性を強く印象づけてくれました。学術会議でのご活躍を期待したいと思います。

最後に、行動科学研連の本務について触れましょう。研連は、分野間の連絡に当たる委員会で、学術会議会長が委嘱する委員（本研連は8名）で構成されます。従って、会員推薦とは無関係です。

本学会からは、本研連新設の際（12期）は岩坪・水野両理事が、13期は水野が、委員を務めることになりました。13期は、他に本研連関係の内山会員、前会員の三隅二不二氏（阪大・人間科学）、国際対応担当の戸田正直氏（北大・文）がおり、残り4名は他学会からの参加です。

新設早々の12期の仕事は、文部省科研費の複合領域の分科に「行動科学」を、細目に「人間情報学」と「行動制御学」を設けるとする意見のまとめでした。13期の仕事はこれからですが、種類や分量の増加は必至と思われます。

（本学会理事・統数研）